

# 地域活性化に於ける食育の研究

～安芸市を事例として～

1150443 戸清 裕康

高知工科大学 マネジメント学部

## 1. 概要

安芸市には、「安芸釜あげちりめん井楽会」がある。本楽会は、安芸で獲れるじゃこを使った「釜あげちりめん井」を特産品として安芸を活性化させる活動を行っている。本楽会の活動をより効果的にするために、所属研究室を通して協力してきた。近年、本楽会が地域産業振興活動の一環として小学校での食育を模索している。

そこで本研究では、安芸釜あげちりめん井楽会としての食育の在り方を提言することを目的とする。

本研究を通して、楽会にふさわしい食育の在り方について提言できたと考えられる。またその結果、楽会の地域活性化の一助となることが期待できる。

## 2. 背景

安芸市には、「安芸釜あげちりめん井楽会」がある。本楽会は、安芸で獲れるじゃこを使った「釜あげちりめん井」を特産品として安芸を活性化させる活動を行っている。本楽会の活動をより効果的にするために、所属研究室を通して協力してきた。近年、本楽会が地域産業振興活動の一環として、小学校での食育を模索している。

## 3. 目的

そこで本研究では、安芸釜あげちりめん井楽会の食育の在り方を提言することを目的とする。

## 4. 本研究の方法

本研究での仮説として、食育とは地元産業への誇りを食を通して次世代に引き継ぐこととした。本研究は、まず、食育によって地域活性化に成功した事例をネットや文献調査によって全国的に探し出す。そして、それによって挙げられた成功事例を調査・分析し、本楽会の食育の在り方を提言する。ネット・文献調査では、食育の先進地として福井県小浜市が多く取り上げられていた。[4][5][6][7][8][9]そこで、安芸市と小浜市を比較したところ、街の規模、市立学校数や海に面した立地といった外形的な類似がみられた。よって、小浜市を成功事例として調査・分析することとした。



図 4-1 小浜市（左）と安芸市（右）の比較

## 5. 小浜市の食育

### 5.1 小浜市の食育のフレームワーク

現地調査、文献調査を行った結果、小浜市の食育は図 5-1 のようなフレームワークから成り立っていると判明した。

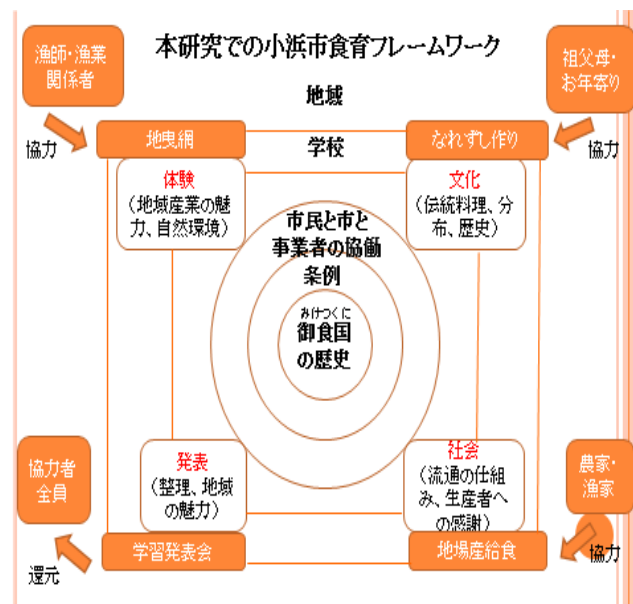


図 5-1 本研究での小浜市の食育フレームワーク

小浜市は、食育において「御食国」としての歴史を重要としている。御食国とは、飛鳥・奈良時代に朝廷に食材を供給していた国のことである。そして、たとえ今後市長が変わったとしても食によるまちづくりを継続するため、また、基本

理念を明文化し市民全員が共通認識の下まちづくりを行うために条例をも制定したのである。また、その条例を行政が主導で行うのではなく、市民が主体的に行うように市民と市と事業者の協働を必要とした。この三者の協働によって、小学校では特徴ある食育が行われている。例えば、なれずし作りでは、伝統料理の作り方に止まらず、どのようにして根差してきたのかといった分布や歴史的背景も教育している。そして、そこで使った食材がどのようにして自分の口に届いているのかといった流通の仕組みを地場産給食によって教育する社会的一面もあり、幅広い内容となっている。さらに、座学だけでなく、地曳網の体験を通して体で感じる教育も行っている。そして、学んだことを整理し、さらに理解を深めるために学習発表会という発表の場を設けている。

## 5.2 小浜市「食のまちづくり条例」

前文では、全国でも数少ない「御食国」としての歴史と伝統を活用し、食による持続可能なまちづくりについてうたっている。そしてそれを実現するための一つとして食育を行っている。第四章では、市と市民と事業者の協働によって行うことをうたっている。行政が主導で行うのではなく、市民が主体的に行うボトムアップを図った。

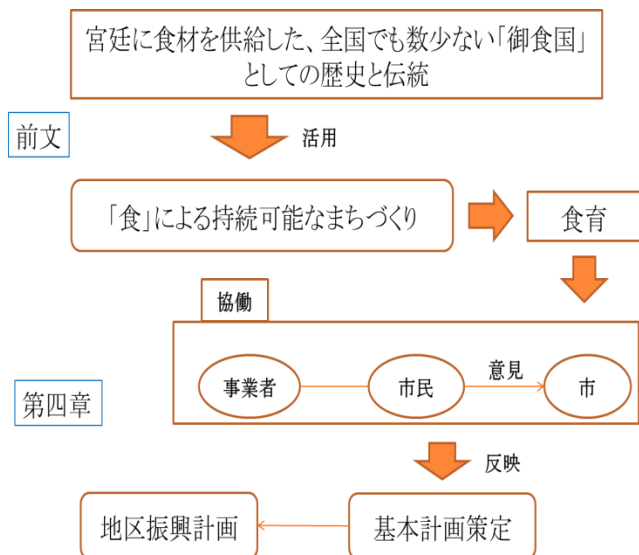


図 5-2 食のまちづくり条例 前文・第四章の説明

第五章では、小浜市での食育についてうたっている。大きくは、教育および伝承とし、具体的には四つの取り組みとなっている。この中でも小学校では、食の重要性を普及と食文

化についての研究を教育している。そのため本研究では、この二つを研究対象として調査・分析する。

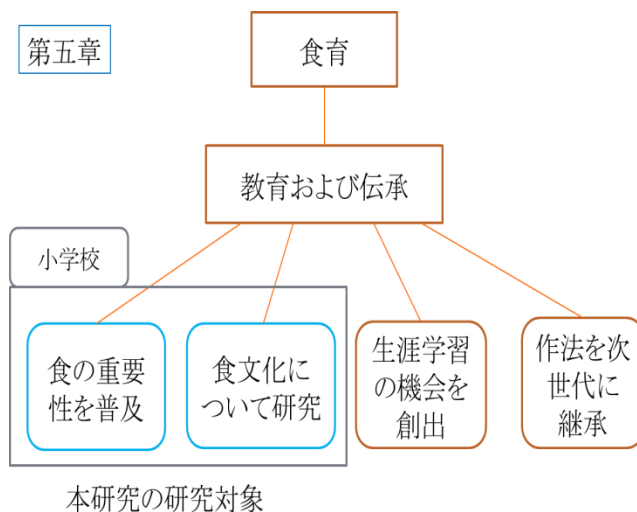


図 5-3 食のまちづくり条例 第五章の説明

## 6. 小浜市と楽会の食育の対比

小浜市の食育と楽会の食育を対比させると図 6-1 のとおりである。

小浜市は、食のまちづくりの一環としての位置付けで、食の重要性の普及と食文化の伝承を目的に行っているのに対して、楽会は、あくまでも地域産業振興の一環としての位置付けで、安芸のじゃこに誇りを持ってもらい、漁業に興味を持ってもらう目的となっている。「準備期間・実績」では、小浜市は平成 12 年に着手し長い準備期間をかけて多数の実績を上げているのに対して、楽会では近年より着手したので実績も一つのみとなっている。授業内容では、小浜市は人文・社会を盛り込んだ幅広い内容となっているのに対して、楽会はじゃこに絞った内容となっている。しかし、じゃこに誇りをもってもらい、ひいては産業振興の位置付けからはじゃこの内需拡大が期待されるため短期的には一定の評価ができると考えられる。ただし、小浜市と違う位置付け・目的としても、さらに調査・分析すると、長期的な評価では問題点があると考えられる。(図 6-2)

	小浜市	安芸釜あげちりめん井楽会
位置付け	食のまちづくりの一環として	楽会の地域産業振興の一環として
目的	食の重要性の普及 食文化の伝承	安芸のじゃこに誇りを持ってもらい、 漁業に興味を持ってもらう
食育準備期間	平成12年「新世紀いきいきまち・むらづくり支援事業」より	平成25年、26年 校長会にて楽会が 小学校での食育を提案
食育実施実績	平成17年 田鳥小学校にて開始 翌年以降、市内12校で順次開始	平成26年 安芸第一小学校にて実施
体制	市、市民、事業者が協働	市と事業者が協働
授業内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>なれずし作り(文化)←市民(伝統料理、分布、歴史)</li> <li>地場産給食(社会)←市、事業者(流通の仕組み、生産者への感謝)</li> <li>地曳網(体験)←市民、事業者(地域産業の魅力、自然環境)</li> <li>学習発表会(発表)→協力者全員(整理、地域の魅力)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ちりめんじゃこについての座学(加工方法、海流の関係、漁の方法、じゃこの種類、時期)</li> <li>安芸市の漁業についての座学(漁獲量、成分、漁師年代別人口、森林との関係)</li> <li>調理実習(釜あげちりめん井の調理方法)</li> </ul>
期待される効果	地元に誇りを持ち、未来にこの誇りを継承していく人材育成	じゃこの内需拡大

図6-1 小浜市と楽会の食育の対比表

楽会の食育の問題点として、じゃこが地域の特産品として定着されていない中じゃこに絞った教育では、一時的な効果は期待されるが、持続的な効果は期待されにくいという問題が考えられる。その改善策として、まず地域そのものに愛着を持たせなければならない。地域を愛することが結果として特産品の定着に繋がり、持続的な効果が期待できる。そのためには、安芸についてもっと理解を深める授業を行う必要があると考えられる。

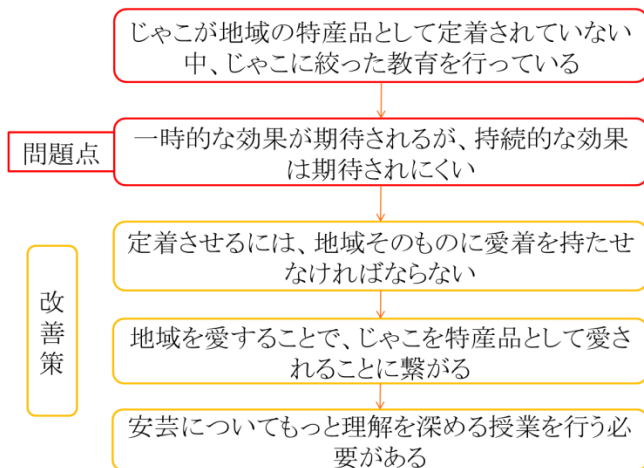


図 6-2 楽会の食育の問題点

図 6-1 より、小浜市の食育はまさに地域そのものの教育となっている。地域を愛する教育で「地育」とも言えるだろう。この授業内容が本楽会の食育の参考になると考えられる。

## 7. 楽会の食育に対する提言

小浜市の食育を参考に、地域に注目して安芸市の郷土史を調査すると素晴らしい風土があることが推測された。

南北に長い立地を生かし、山で獲れる豊富な林産物を船によって運搬する廻船業が盛んだった。この木材を遠く大阪まで運んで付加価値を高めていた。戦後、輸入の自由化・燃料が石油に変化したことで廻船業が衰退した。そこで昭和 30 年じゃこ漁が始まった。これは、廻船業での操舵技術による関連多角化したためと推測される。このように安芸市は事業の才能に長けていた風土であったと考えられる。そのような風土によって、岩崎弥太郎や近鉄創始者の井内彦四朗といった有能な事業者を輩出したのだろう。

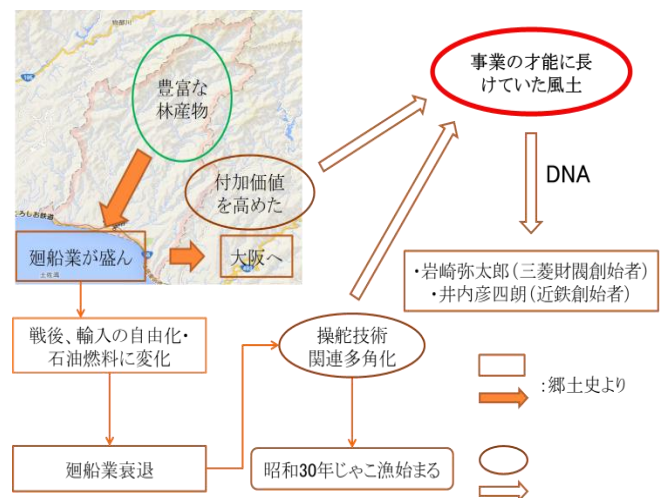


図 7-1 楽会の食育に対する提言 (事業)



さらに、廻船業が盛んになり安芸が繁栄することで、経済的余裕、娯楽文化の発達があり、野良時計や土居廓中など歴史的・芸術的価値のあるものが生み出されたと言える。これらの影響を受け、教養を育んだことから多くの芸術家を輩出したのだと推測される。よって、芸術を育む風土もあったと考えられる。

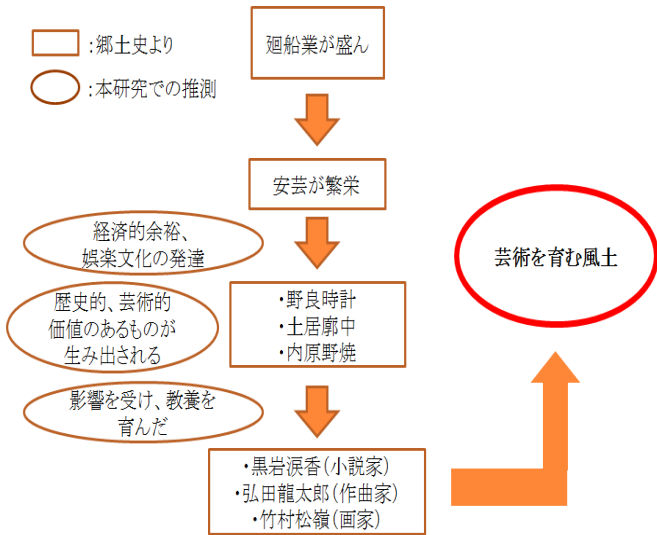


図 7-2 楽会の食育に対する提言(芸術)

このような優れた風土を教育に取り入れ郷土を愛する授業を行う。(図 7-3) 授業は事業と芸術の二本柱で構成する。例えば、近鉄創始者井内彦四朗の教育では、鉄道の歴史に触れ、その鉄道よっての都市開発の教育といった社会科の授業へと繋がる。また作曲家弘田龍太郎の教育では、彼が作曲した曲を鑑賞する音楽の授業へと繋がる。そして、郷土愛を教育した後、じゃこについて教育することでじゃこが安芸にとって自慢の特産品であると認識される。このようにしてじゃこが特産品として持続的に定着されると期待できる。

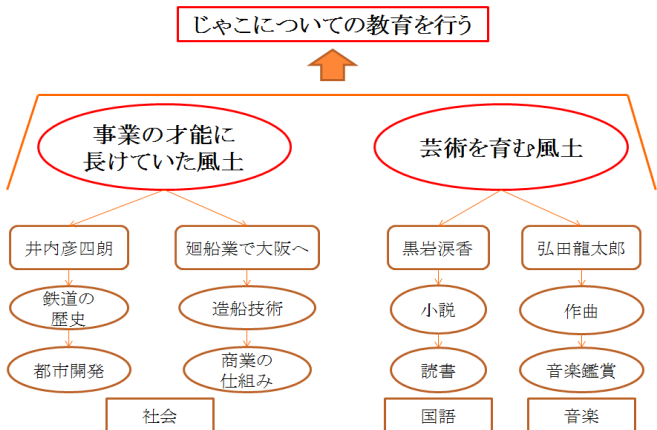


図 7-3 提言する食育の構成

## 8. 結論

### 8.1 成果

本研究を通して、以下の成果が上げられたと考えられる。

- 楽会にふさわしい食育の在り方について提言できたと考えられる。
- その結果、楽会の地域活性化の一助となることが期待できる。

### 8.2 今後の課題

今後の課題は、以下のものが考えられる。

- 提言した食育を実践する上で楽会に研究成果を評価してもらう必要がある。
- また、提言した食育は方向性を示したに過ぎず具体的な内容を検討しなければならない。

## 参考文献

- [1] 安芸市役所：『安芸市史 概説編』 1979年
- [2] 安芸市役所：『安芸市史 民族編』 1979年
- [3] 安芸市役所：『安芸市史 歴史編』 1979年
- [4] 北海道市町村振興協会：「食」がまちを元気に「御食国(みけつくに)」の生涯食育、地域活性化戦略 福井県小浜市”プラクティス：自治体職員のための政策情報誌,2012
- [5] 林紀代美：”水産業・水産物を活用した食に関わる学校教育活動の可能性と課題 一小浜市立田鳥小学校の事例から一”地域漁業研究,地域漁業学会,2007
- [6] 国土交通省 都市・地域整備局：全国初の「食のまちづくり条例」(福井県小浜市), [www.mlit.go.jp/crd/city/mint/htm\\_doc/pdf/069obama.pdf](http://www.mlit.go.jp/crd/city/mint/htm_doc/pdf/069obama.pdf)
- [7] みずほ総合研究所：福井県の地域活性化事例～食のまちづくり - 小浜市「食育文化都市宣言」,みずほ地域経済,インサイト, [www.mizuho-ri.co.jp/publication/research/.../EEI071002.pdf](http://www.mizuho-ri.co.jp/publication/research/.../EEI071002.pdf),2007
- [8] 小浜市：『食のまちづくり条例』 2001年
- [9] 鈴木裕範：“地域の暮らしと文化を耕すー福井県小浜市・食を活かした地域づくりー” 経済理論,和歌山大学経済学会,2006